



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会信州なび助

令和4・5年度 全教連課題研究 研究報告書

全教連課題研究テーマ「教師のICT活用指導力向上」

「教師のICT活用指導力の向上」につなげるための学校マネジメント
～「チーム学校」による協働的な学びへの支援のあり方～



令和6年3月

長野県総合教育センター

目次

| | | |
|-----|-----------------------------------|----|
| I | 応募テーマ | 1 |
| II | 研究の要旨 | 1 |
| III | 研究の経過 | 1 |
| | 1 令和4年度 | |
| | 2 令和5年度 | |
| IV | 研究内容 | |
| | 1 実態アンケートの実施とその分析 | 1 |
| | 2 アンケートの実態を踏まえた研究の方向 | 5 |
| | 3 チーム学校の組織づくりに向けた3つのアプローチ | 5 |
| | 4 研究報告 | |
| | 【アプローチ1】 | |
| | ICTを活用しながら学校マネジメントを意識できる研修講座の構築 | 6 |
| | 【アプローチ2】 | |
| | 教育センター研修での学びを自校につなげるための校内研修に対する支援 | 14 |
| | 【アプローチ3】 | |
| | 教育センター研修の講座運営改善とセンター所員の意識改革 | 19 |
| V | おわりに | 26 |

I 応募テーマ 「教師のICT活用指導力向上」

応募研究課題名 「教師のICT活用指導力向上」につなげるための学校マネジメント

II 研究の要旨

GIGAスクール構想の実施により、教育現場では児童生徒への一人一台端末の導入が進められたが、教員のICT活用状況には、学校あるいは個人によってまだまだ大きな差があり、教員一人一人の悩みも多岐にわたる。令和4年度がまだまだコロナ禍であったことも影響したと思われるが、アンケートの分析を進めた結果からは、悩みや課題の根底には、教職員同士が情報交換したり、悩みを相談したりする機会が減り、教職員間の関係性が希薄になっていることや、忙しい毎日の中で、必要な校内研修がなかなか実施できていない現状が見えてきた。ただ、校内にICTを効果的に活用して日々の授業改善につなげたり、日常の校務の効率化につなげたりしている教職員が全くいないわけではない。それは、アンケートで一番多かった「教師間の技術格差」という悩みからも分かる。

そんな学校現場におけるICT活用の二極化の解消に向けて、教職員一人一人が、ICT活用に長けた職員とのつながりや、悩みを共有できる同僚との関係性を大切にしながら校内全体のICT活用が充実していくことを願い、学校全体の組織力、教職員同士の結びつきの強化に焦点を当てた「学校マネジメント」につながるように、以下に示す3つの取組を推進してきた。

【アプローチ1：ICTを活用しながら学校マネジメントを意識できる研修講座の構築】

【アプローチ2：教育センター研修での学びを自校につなげるための校内研修に対する支援】

【アプローチ3：教育センター研修の講座運営改善とセンター所員の意識改革】

III 研究の経過

1 令和4年度

- (1) 学校現場におけるICT活用の実態について情報収集（研修受講者へのアンケート・専門主事による学校視察）及び分析
- (2) ICT活用を通して学校の組織づくりをサポートする新規研修講座の構築
- (3) 教育センターにおける所内全体の研修体制の見直し。教育センターの研修と学校における校内研修をつなぐための講座運営の検討

2 令和5年度

- (1) ICT活用を通して学校の組織づくりをサポートする新規研修講座の実施、及び受講者アンケート及び講座ふりかえりの分析と改善策の検討
- (2) 校内研修をサポートする「教職員研修会サポート」による学校マネジメントの推進
- (3) 総合教育センターにおける所内全体の研修体制の更新。協働的な学びあいにつなげやすくなるような講座運営の検討

IV 研究内容

1 実態アンケートの実施とその分析

ICT活用指導力の向上を見据え、学校全体の組織力、教職員同士の結びつきの強化に焦点を当てた「学校マネジメント」における研究を進めていくにあたり、教職員の実態について大きく2種類のアンケートを実施した。

(1) アンケートその1：ICT活用にかかわる現状について

令和4年度6月から9月において、ICT活用に関する学校現場での悩みやニーズを把握するために、「希望研修」として、自主的に「ICT活用」に関わる研修講座を受講されていた現場の教職員162名（全7講座）に対し、ICTの活用の頻度、ICT活用に関しての悩みや課題を入力いただき、その結果を校種別、学校規模別に整理した。

【学校規模の振り分けの判断基準】※学校ごとの総学級数を基準に全162校を振り分けた

| | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 特別支援学校 |
|------|----------|----------|-----------|-----------|
| 小規模校 | 総学級数1～6 | 総学級数1～6 | 総学級数1～9 | 総学級数1～20 |
| 中規模校 | 総学級数7～18 | 総学級数7～15 | 総学級数10～18 | 総学級数21～60 |
| 大規模校 | 総学級数19以上 | 総学級数16以上 | 総学級数19以上 | 総学級数61以上 |

【学校規模ごとの校数】

| | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 特別支援学校 | 合計 |
|------|-----|-----|------|--------|------|
| 小規模校 | 18校 | 15校 | 8校 | 4校 | 45校 |
| 中規模校 | 34校 | 16校 | 18校 | 2校 | 70校 |
| 大規模校 | 9校 | 9校 | 23校 | 6校 | 47校 |
| 合計 | 61校 | 40校 | 49校 | 12校 | 162校 |

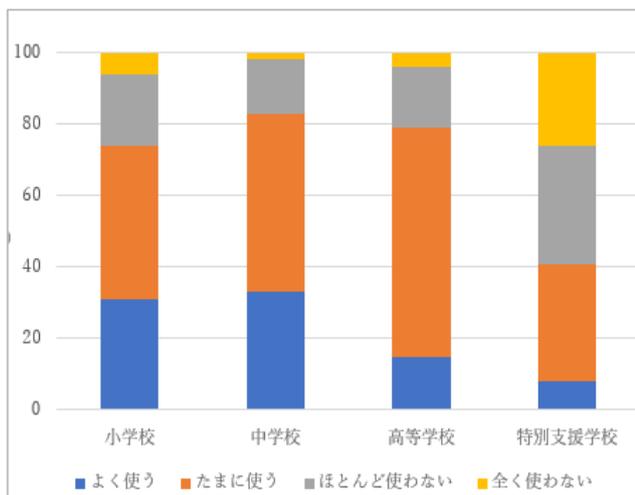
【悩みや課題の分類】

悩みについての入力には任意で自由記述とし、複数回答もありとした。寄せられた悩みを以下のアからオの5つの項目に振り分け、この5つに当てはまらないものについては、カ「その他」に分類した。

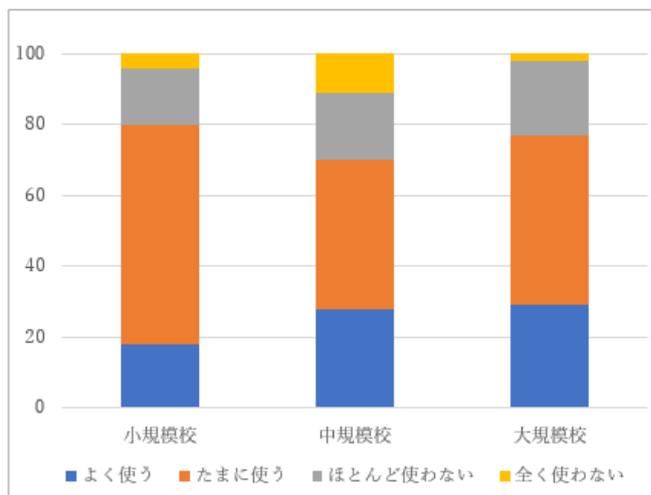
- ア：自分の知識・スキル不足
- イ：生徒指導・情報モラル
- ウ：研修時間の不足
- エ：児童生徒間、教師観の活用格差
- オ：ハード面（Wi-fi接続・不具合・セキュリティ等）
- カ：その他

① ICT活用の頻度について（学校生活全般）

◆校種別のICT活用



◆学校規模別のICT活用

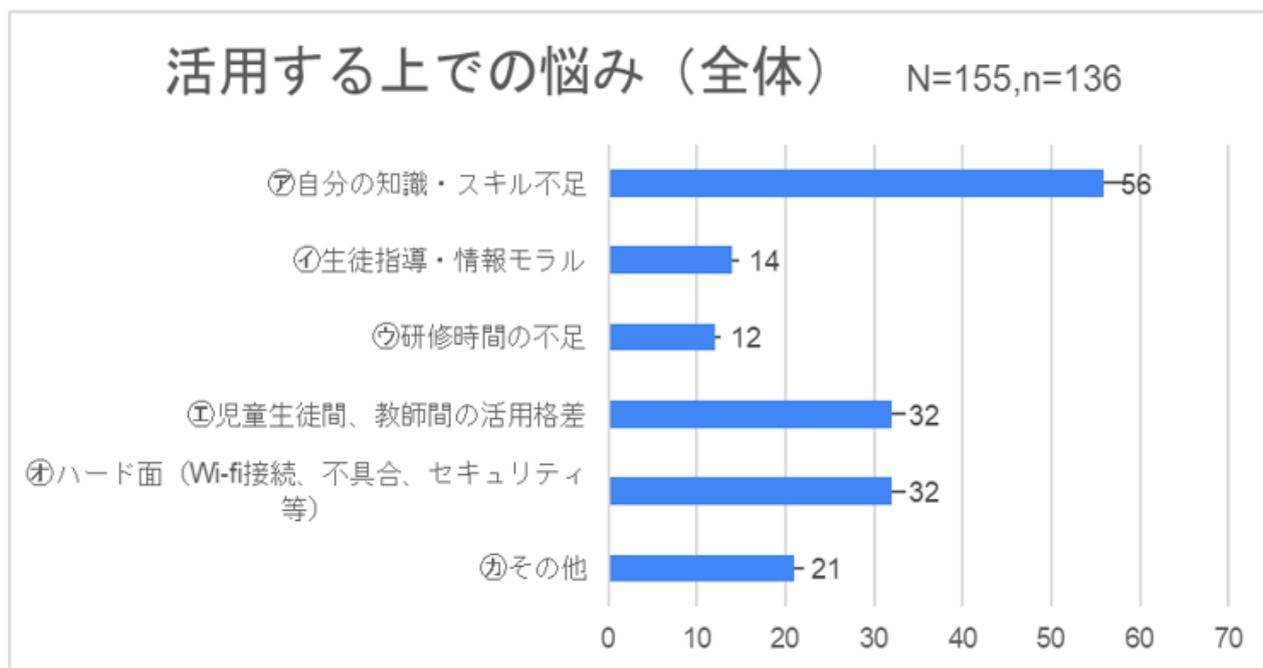


【考察】

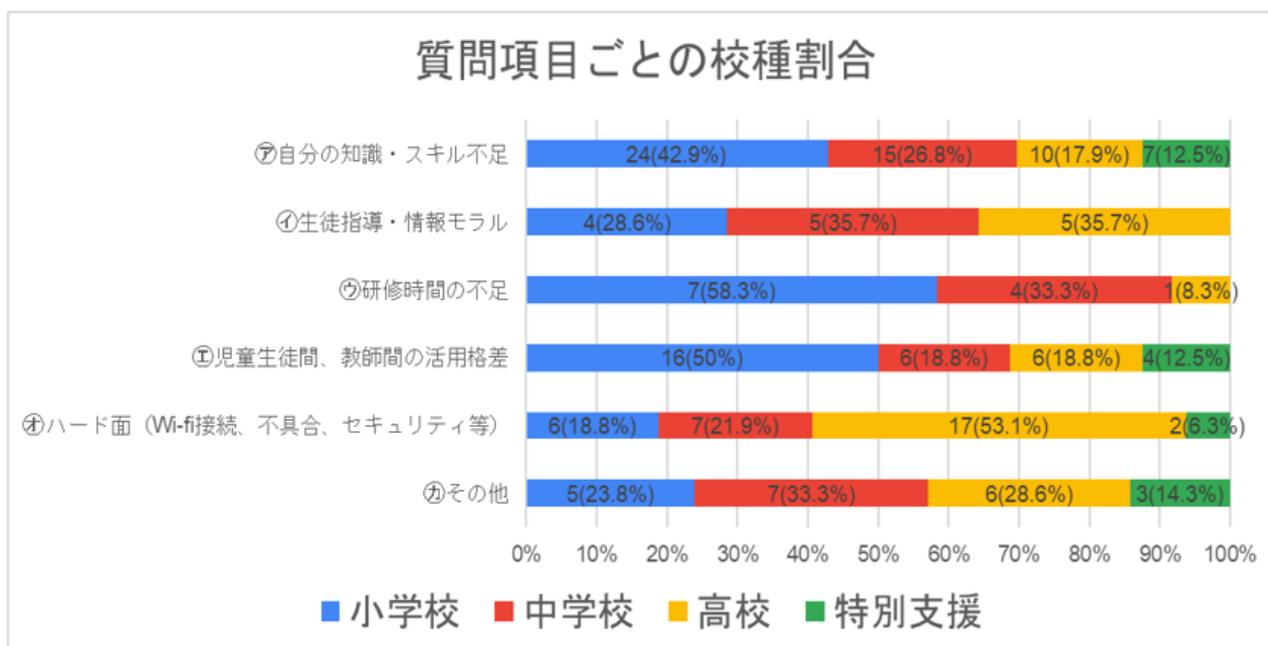
小中高において、ICTを学校生活で「よく使う」「たまに使う」を合わせた割合でみるとそれほど違いはないが、「よく使う」だけに焦点をあてると、小中学校と高校、特別支援学校ではその活用割合に差がみられる。また同じように、ICTを「よく使う」に焦点をあてて学校規模別にみると、小規模校よりも、中規模校、大規模校の方が若干ではあるがICT活用を積極的に行っている職員の割合が高いことがわかる。多くの職員がいることにより、ICTにかかわる情報を得やすい状況があるのではないかと予想される。

② ICT活用の悩みや課題について

◆ICT活用における悩み(全体)



◆ICT活用における悩み(校種別)



【考察】

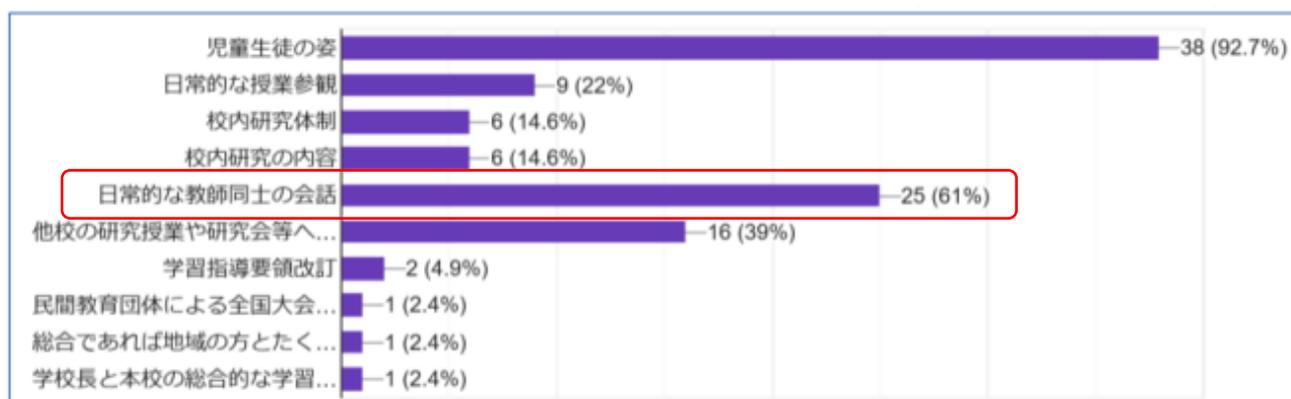
I C Tを活用する上での一番の悩みが「自身の知識・スキル不足」であるということは、裏返せば、I C T活用の知識やスキルを向上させたいという願いでもある。また、自身のスキル不足だけでなく、教師間や生徒間の活用経験の格差への悩みも多く、その割合は、小学校や中学校の方が顕著である。この格差を埋めていくためには、一人一人のスキル向上だけ頼るのではなく、組織全体としての意識改革が必要だと思われる。高校では、活用だけでなくハード面での悩みが多く、BYODを進めていることで、多様な端末への対応に苦慮していることが予想される。

一台端末は導入されたが、まだまだ授業づくりや学校生活において一人でI C Tと向き合うことに大きな壁を感じている職員が多い。コロナ禍の影響もあるかもしれないが、学校内、学年内等における情報共有が希薄になっているため、なかなか同僚に相談できず、やりたいことがあっても実現に至るまでの知識や技能が伴わずにあきらめてしまったり、一人で何とかしなければいけないと感じたりしている教職員は多くいそうである。

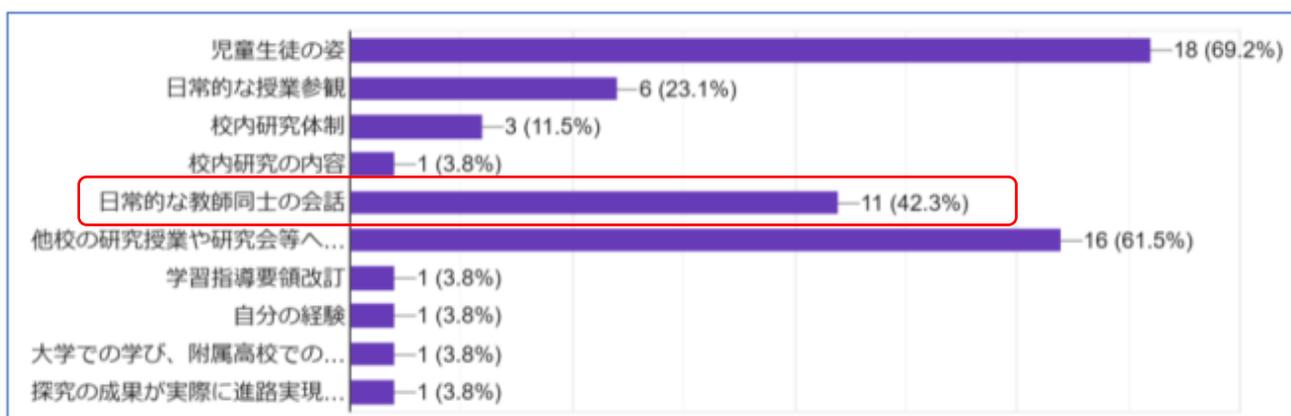
(2) アンケートその2：授業づくりについて、自身の意識が変わったきっかけについて

令和4年度8月の総合・生活科にかかわる探究を核とした授業づくりの研修講座（小中学校）40名、学校視察訪問（高等学校）18名に、「自分自身の授業づくりの見方や考え方が変わったきっかけは何ですか」というアンケート項目に答えてもらい（複数回答あり）、その結果を整理した。

◆総合生活科研修講座(小中学校)



◆学校視察訪問(高等学校)



【考察】

自分自身の授業を見直したり、新たな気づきを得たりする機会として、小中高ともに児童生徒の姿がきっかけとなっていることが分かる。また、校内の研究体制やお互いに授業を見合うことはもちろん、日

常的な教師同士の会話がそのきっかけになっている回答が多く、何気ない教師間のやりとりによってお互いの教師観や授業観が更新されていく可能性が大きいことが予想される。

2 アンケートの実態を踏まえた研究の方向

職員間の何気ない会話や校内での情報交換によって教師の「観」や見方、考え方が更新されていくきっかけになることを考えると、校内においてお互いの情報交換が進むきっかけ作りが必要である。教職員の求めに応じながらICTに関わる様々なコンテンツ開発を行うこともできるが、学校現場で教職員同士の情報共有ができづらくなっている昨今において、ICT活用のスキルやICTを駆使した教材準備のアイデア等を対話を通して高め合える集団を目指すことが、多くの子供たちのICT活用、ひいては「主体的・対話的で深い学び」に直結していくのではないかと考える。

教職員が協働して高め合える「**チーム学校**」を目指し、組織づくりのために私たち教育センターができる役割として、**学校マネジメント**の視点から、限りある時間を有効に使いながら、学校組織内における情報共有や相互協力がよりよく機能するための支援の方法や一人の先生の学びが校内で広く転移していくための方策を「**教職員同士のつながり**」をキーワードに、以下に示す3つのアプローチから探っていく。

3 チーム学校の組織づくりに向けた3つのアプローチ

アプローチ1:ICTを活用しながら学校マネジメントを意識できる研修講座の構築

〈ねらい〉

教職員が学校づくりや学級づくりで大事にしていることや授業改善に向けた思いや願いをICTを活用することで実現していく可能性を考えたり、そもそもなぜICTなのかを問い直しながら、ICT活用の魅力やICTだからできる強みなどをお互いの視座や価値観から学び合ったりできる研修講座を構築することで、協働的、体験的な要素から校内研修実施への意欲を高め、実践につなげていただく。

アプローチ2:教育センター研修での学びを自校につなげるための校内研修に対する支援

〈ねらい〉

教育センターで得たICT活用に関わる学びを校内の教職員と共有し、それぞれの実践につなげやすくするために、その校内研修の進め方の相談や使用する演習シート等の準備を一緒に行ったり、当日の校内研修運営の支援を行ったりするためのサポート体制を整える。

アプローチ3:教育センター研修の講座運営改善とセンター所員の意識改革

〈ねらい〉

教職員一人一人がICT活用指導力を向上させていくため、ICT活用に直結する研修講座だけでなく、教育センターで行っている300を超える研修講座（指定研修、希望研修含む）すべての講座において、教職員が自身の学びを自校にもどってからの協働的な学びあいにつなげやすくなるように、「対話」を核とした協働的、体験的な研修講座への運営改善を行う。

4 研究報告

アプローチ1:ICTを活用しながら学校マネジメントを意識できる研修講座の構築

(ねらい)

教職員が学校づくりや学級づくりで大事にしていることや授業改善に向けた思いや願いをICTを活用することで実現していく可能性を考えたり、そもそもなぜICTなのかを問い直しながら、ICT活用の魅力やICTだからできる強みなどをお互いの視座や価値観から学び合ったりできる研修講座を構築することで、協働的、体験的な要素から校内研修実施への意欲を高め、実践につなげていただく。

そのために2つの研修講座を構築した。2つの研修の特色は、学校のマネジメントに関わった内容を主とし、学校の組織改革を推進しやすいミドルリーダーに参加していただくことで、校内研修への広がりを目指している。

センター研修講座① 令和5年6月30日(金)

【学校組織マネジメント応用Ⅲ ～ICT活用と学校マネジメント～】 オンライン

主な研修対象:ミドルリーダー 47名受講

(1) 研修のねらい

ICT(クラウド)の可能性を語り合うことを通して、自校に戻って実現してみたい「ICT(クラウド)活用」の実践を見いだしていただくため、某小学校から許可を得てお借りしたグランドデザイン・日課表をもとにして、ICTを活用して広がっていきそうな取組を探っていく。

令和5年度 ○○市立◆◆小学校 グランドデザイン

【○○市のビジョン】
知育力による未来をひらく心豊かな人づくり

【小中連携、一貫教育の推進】
中学校区がめざす子どもの姿
○自ら考え、人と関わり、進んで行動するたくましい子ども
○ふるさとを誇りに思う、心豊かな子ども

◆学校経営の願い◆
子どもの育ちに寄せた教育活動の推進と地域や学校の特性を生かした学校づくり

本校の校訓⇒教育目標
向上心 やるき
耐久身 げんき
言実行 こんき

◆地域・保護者の願いや期待◆
地域 ○○が好きな子
地域の行事に参加してほしい
保護者 児童一人一人を大事にした指導

【めざす子どもの姿】 笑顔あふれキラキラ輝け 未来に向けて

- やる 主体的に学び、共に考えることで、未来に生かせる生きる力を育む子どもたち
- げん 心身ともに健康で明るく、自分も友達も大切にできる優しい子どもたち
- こん 夢を持ち、自分の立てた目標に粘り強く取り組む子どもたち
- ふるさと ○○のことが大好きな子どもたち

重点目標

伝え合おう きたえよう ひびかせよう

【わかる・楽しい授業づくり】

①主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業づくり

- 少人数の良さを生かした「学び」
- ・自ら考え、学び合う時間を確保
- ・学習の見通しや振り返りの場を大切に
- ・他者(友だち・教師・地域・先人)と関わりながら学ぶ場面の充実
- ・ICT機器の効果的な活用
- ・授業のユニバーサルデザイン化
- ・異学年集団による多様な考えに触れられる授業
- 授業がもっとよくなる3観点の確実な実施
- 学年を越えた専科制授業の導入
- ・担任との情報共有

②基礎的な学力の定着 (家庭学習と授業のつながり)

- ・自主学習の推進
- ・読書の推進

③教師の指導力向上に向けた研修の充実

- 授業公開を通じた教師の学び合い
- 教科研究や学年会での情報交換 など

【自己肯定感育む、集団づくり】

①居心地の良い学校づくり

- あいさつ・返事・場に応じた言葉
- 学校中にあふれる歌声

②認め合い支え合う学級づくり

- 温かく優しい思いやりの心の育成
- ・学級活動・道徳教育・人権月間等
- 認め合える朝の会・帰りの会の工夫

③児童理解と個々の児童に寄り添った支援

- 特別支援教育の充実
- 一人一人のニーズに合わせた支援
- 職員間の情報交換を充実させた職員会

④異学年縦割り班を生かした取組

- 児童会活動や集会、集団遊び、集団登下校
- 姉妹学級交流、

⑤心身を鍛える取組

- 目標をもったパワーアップタイム(全校併用)
- 心みがき清掃「黙って、美しく」

⑥チーム学校

- みんなが子ども達、全員の先生

【ふるさとに学ぶ】

① 学友林・メダカ池の活用 ② 地域の外部講師を招聘した活動 ③ 地域素材を活用した学習活動

検証方法: ●CRT検査⇒全国比ポイントの向上 ●児童・保護者による学校評価⇒肯定的評価 80%以上

家庭ですること(行動目標)

子どもたちに積極的に話しかけ、コミュニケーションをとる

地域ですること(行動目標)

子どもたちの学校生活を支え、子どもたちに寄り添い、安心・安全を見守る

| 令和5年度 日課表 | | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-----------|---------|-----------|-----------------------------|---------------------|-----------------------------|-----------|
| 時刻 | 日課 | | | | | |
| 8:20 | 勤務開始 | | | | | |
| | 給行事 | 読書(職員研修) | (準備運動) パワーアップタイム(8:25~8:35) | 校長講話 児童集会 読書 | (準備運動) パワーアップタイム(8:25~8:35) | 全校体育 全校音楽 |
| 8:35 | 移動 | | 移動 | 移動 | 移動 | 移動 |
| 8:40 | 学級活動 | | | 朝の会 | | |
| 8:50 | 移動 | | | 移動 | | |
| 8:55 | 1 | | | | | |
| 9:40 | 2 | | | | | |
| 9:45 | | | | | | |
| 10:30 | 3 | | | | | |
| 10:55 | 4 | | | | | |
| 11:40 | 5 | | | | | |
| 11:45 | | | | | | |
| 12:30 | 給食 | | | | | |
| 13:10 | 休憩 | | | | | |
| 13:25 | 125 | | | | | |
| 140 | 清掃 | 清掃 | 清掃 | 清掃 | 清掃 | 清掃 |
| 145 | ドリル・ドリル | ドリル | 読書 | 読書 | ドリル | ドリル |
| 200 | 移動 | 移動 | 移動 | 移動 | 移動 | 移動 |
| 205 | 5 | | | 125~210 | | |
| 250 | 6 | | | 2:15~3:00 | | |
| 255 | 6 | | | 3:00~3:15 | | |
| 3:40 | 帰りの会 | | | 下校 3:25 | | |
| 4:00 | 下校 | | | | | |
| 4:10 | 議会 | 教科会議 支援会議 | 学級の日(校務係) | 職員会議 職員研修 教務会 3:35~ | 学年会 | 学級の日 |
| 4:50 | 勤務終了 | | | | | |

【某小学校からお借りして加工した

グランドデザインと日課表】

(2) 研修方法

①グランドデザイン及び日課表をもとに、校内の教職員みんなで実践していけそうな「ICT(クラウ

ド)を活用した取組」を各自で考えてスプレッドシートに入力し、その取組に「1」「2」「3」の難易度をつける。(1 すぐできそう 2 がんばればなんとかなるかも 3 ハードルが高そう…)

スキルの難しさ 浸透させる難しさなど総合的に判断) 【個人 15分】

②個々の考え(取組)を発表し、共有する(自身でつけた難易度の理由も語りながら)。【グループ 10分】

③以下の点においてグループ討議する 【グループ 20分】

◆是非実現したい取組を議論し赤字にする

◆実現したい取組を校内に浸透させ、職員みんなで実現していくための具体的な方法・アプローチの仕方を議論する

④グループでの一押しや特に話題になったこと等を全体共有【全体 15分】(ファシリテーター発表)

入力したスプレッドシート

| 名前 | 着目した項目 | みんなで実践していけそうなICTを活用した取組 | 難易度 |
|----|----------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| | 家庭学習と授業のつながり | 国語の音読の宿題を家で録音してくる(タブレットで)。それをclassroomなどに投稿。クラスで共有、教師も評価。翌日国語の授業で同じ教材を音読している様子を教師が録画し、動画のリンクをQRコードにして保護者に知らせる。 | 2 |
| | (昨年度まで)家庭科の調理実習ができなかったときに、取り組んでみて、よかったなと思ったのですが... | 音読の宿題の録音と似ていますが、週末の宿題で調理をしたもの(材料や工程から完成まで)をロイロノートで自分で編集して提出しました。共有できるのでクラスみんなのものが見られます。中には、家族の方が感想コメントを投稿してくれて子どもたちのモチベーションにもなっていました。 | 1 |
| | 朝の会 | 健康観察をその場で入力 養護教諭と共有 | 1 |
| | 校務係会 学年会 教科会 | 提案資料をグーグルドライブにアップ コメントを書き込んでもらい、その場で修正 | 2 |
| | 児童会 クラブ | classroomを作り、クラブの持ち物や話し合う内容を事前に通知する。 | 1 |
| | 一人一人のニーズに合わせた支援(グランドデザイン) | 生徒指導事案を共有シートに入力し、随時共有。「複数の児童生徒」対「1人の先生」という構図から、「1人の児童生徒」対「全先生」という構図へ。(前任校で実践) | 2 |
| | 特別支援教育の充実 | 生徒指導的に気になる子の情報(きらりと光る姿、効果のある話し方・伝え方、配慮事項など)を1つのシートに共同編集していくと、いろいろな先生の情報が1つに集まっていいなあと。荒木先生と似ていますね! | 2 |
| | ドリル学習 | Eライブ러리 担任は子供たちの学習状況(理解度、進捗状況など)を把握 | 1 |
| | 朝の読書 | その日読んだ本の題名と簡単な感想を、シャムボードなどの掲示板アプリに書きこみ、みんなで共有。同じ本を読んでいた同士で会話が弾む可能性も!? | 1 |
| | 児童集会 校長講話 | Meetで参加 リアルタイムでみんなの意見や考えをロイロアンケートやグーグルフォームで表示 | 1 |
| | 日報・遠歴・月歴など | e4th入っている市町村は、連絡事項関係はすべてe4th上でできると思います(生徒指導上直接話すべきことは除いて)。あとは、市町村の経済力の問題が大いにかと。お金をかけて、まずは環境を整えてくれれば、誰でもトランスフォーメーション化していくのでは・・・。 | 2 |
| | | 体力テストの結果や健康診断の結果を、児童生徒自らがフォーム入力、グラフィ化して成長過程を自身で実感できるよ | 1 |

入力した内容をもとにブレイクアウトルームで情報交換



グループはあえて、他校種(小学校、中学校、高校、特別支援学校)が混ざるように4人編成とした

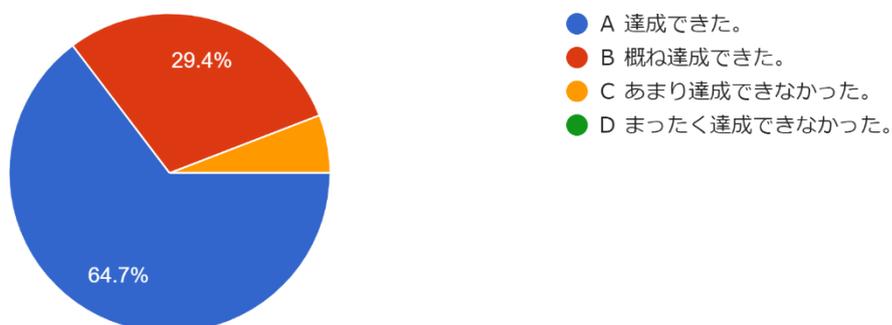
全 10 グループで入力された I C T を活用できる取組のアイデア数は 142 個。そのアイデアを項目ごとに分類してまとめた。教職員のアイデアをそのまま整理して載せた「グランドデザイン編」と「日課表編」の 2 種類を、研修後に受講者の所属校の管理職あてにデータを送付した。

研修で使用したグランドデザイン・日課表は各受講者の学校のものではないため、研修でおこなった演習と同じことを各校のグランドデザインを使用して行うことで、よりその学校の組織作りにつながっていくと考える。研修において同じ資料を扱った理由は、同じ内容でも、人によってその見方や発想の仕方はさまざまであることを感じていただくため。自分には考えつかない新たな視点が得られたことは最後のふりかえりにも多数寄せられた。このあと受講者が、次は自校のグランドデザインで同じことを校内研修として取り組むことで、教職員全体の意識の変容につながることを願っている。

(4) 受講者のふりかえりから

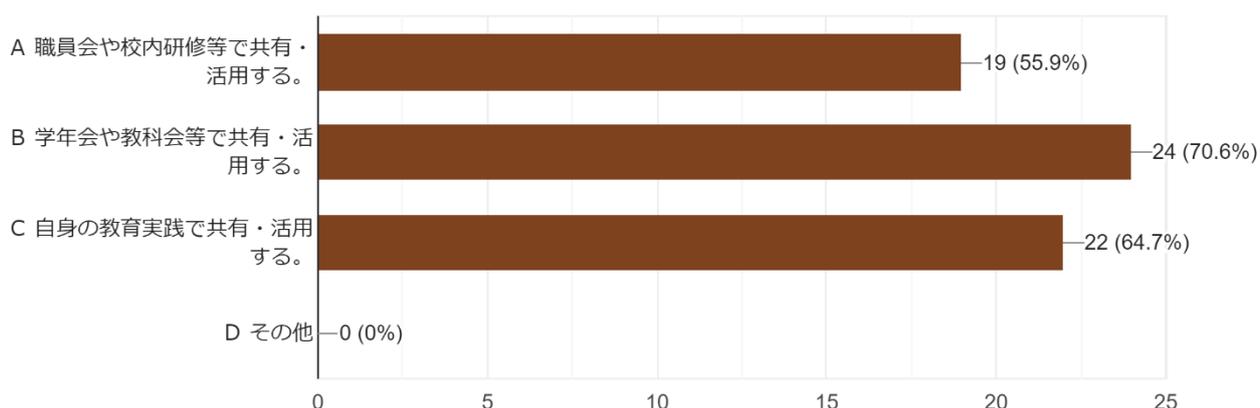
I 研修の成果 講座のねらいを達成することはできましたか。下の○に✓を入れてください。

34 件の回答



II 研修内容の共有・活用 研修で得られた内容を…。下の□に✓を入れてください。（複数回答可）

34 件の回答



知らなかった（思いつかなかった）新たな取組を他校の先生方と考え勉強になりました。また、正直どれも「できる」と思える取組ばかりだったので、今日から実行したいと思います。グランドデザインをもとに「どのような I C T で実現できるか」を考えてみると、まだまだたくさんあるのだなと思いました。1 つずつ実現していくと、勤務時間が確実に減ると思います。（中学校教諭）

まずは、一番情報共有の多い学年会の中に取り入れ、便利なのが実感できたところで、他学年や職員会議などに広めていけたらと思います。①学年会要項をクラウドで共有し、見たいときに見られる、みんなで書き込める、検討したことをタイムリーに編集していけるようにしたい。②学年間の日々の連絡（緊急でないもの）をチャットで共有することにも挑戦したい。③学年の全児童が、学級を超えて友達のシートを閲覧できるように整えたい。（小学校教諭）

グループワークを通して、活用の視点は無限にあることが分かりました。これまで取り組んできたことをICTに置き換えていくことで共有の幅は一気に広がることを感じました。自己肯定感を育てる学級づくりのために、まずは児童会を動かして、「よい姿」や「がんばる姿」をクラウド共有する仕組みを作り、それを学級に広げていく取組はぜひ進めたいと思います。(小学校教頭)

偶然集まった50名以上の先生方のアイデアを出し合うという場面を経験したことがなかったので、とても新鮮でしたし、このデータをいただけるようでしたら、是非今後の学校改革の参考にさせていただきたいと思いました。(中学校校長)

今回は仮想のグランドデザインであったが、自分の学校について考える時間があってもよいかと思った。というよりも、自分では思いつかない意見もあるので、それぞれの学校のグランドデザインを見て考えるのもよいのではないか。自校ではグランドデザインの根本的な見直しが必要だと考えていました。その際に今日のようなICTや生徒の可能性について思いを巡らせながら組み立てていくのはとてもよいと思いました。(高等学校教諭)

(5) 成果と課題

この研修の成果として、研修内容を職員会にて活用したいと答えている割合が半数以上の56%いることやグループセッションの中でも「まずは学年会や教科会からマネジメントを進めていく」等の話題が様々なグループで出ていたこともあり、校内に広げていく具体的なビジョンが持てた教職員が多かった。また、受講者ふりかえりにおいて、マネジメントの新しい視点に気づき、学校で生かしたいという言葉が非常に多かったことから、自身の経験と他者の学びを重視した「対話」の機会を多くとったことはチーム学校の組織づくりのきっかけとして非常に有効だったと思われる。

課題としては、内容面でのニーズが全員に一致していたかと問われると難しい(もっと高度なICTスキルの獲得を目指していた受講者もいる)。ただ、そのような教職員からの同グループへの実践報告やアドバイスやアイデアがあったことで、情報交換がより活性化したことも事実である。また、仮想のものではなく、自校のグランドデザイン、日課表を持ち寄って検討したほうが、さらに自分ごとになり、自校に還元されやすい。組織づくりが活性化するために一番良い方法は何かという視点で引き続き講座構築の方法を検討していく。

(6) 次年度の方向

- ・今回オンラインでの開催だったが、直接顔を合わせたほうがお互いに聞きたいことを聞きやすい雰囲気があるため、参集での実施としたい。
- ・ICTを活用していくためのマネジメント研修であるため、実際に端末を活用して、体験的な内容を取り入れたい。今回のようにスプレッドシートの共同編集を実際に行うことで、この活動さえもICT活用の大事な経験になっている。
- ・受講者の悩みを事前に把握しておき、その悩みに応じて、受講者のニーズに応じた情報交換ができるグループを意図的に設定をする。
- ・「マネジメント」の講座として、学校運営にかかわる内容を取り入れているため、学校の管理職の参加をもっと呼びかけていく。さらに、学校組織を動かすための方法の具体にまで掘り下げられるような内容にし、グループ内の対話が活性化するようにファシリテーターの設定や役割をさらに明確にする。

(1) 研修のねらい

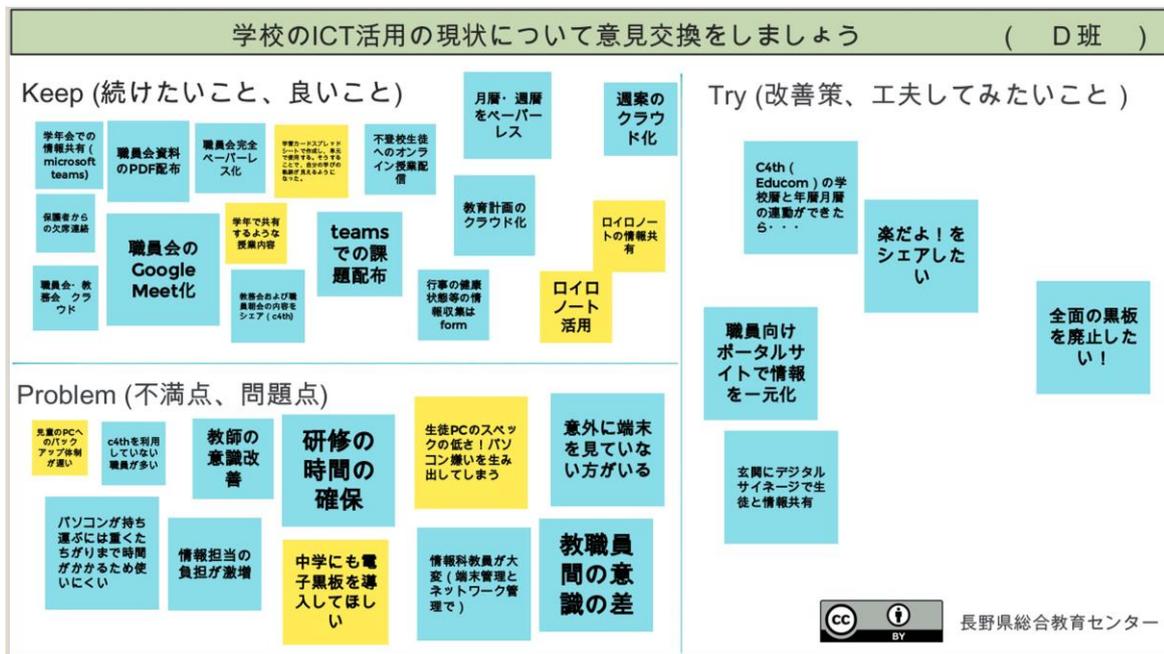
ICT活用の現状と課題、校内のICT活用を推進していくための要点を理解し、各校の強み、課題、改善点、解決方法等を実際にICTを体験しながらKPT法などによってグループ共有することを通して、ICT活用推進の立場から校内研修指導の意欲を高める。

(2) 研修方法

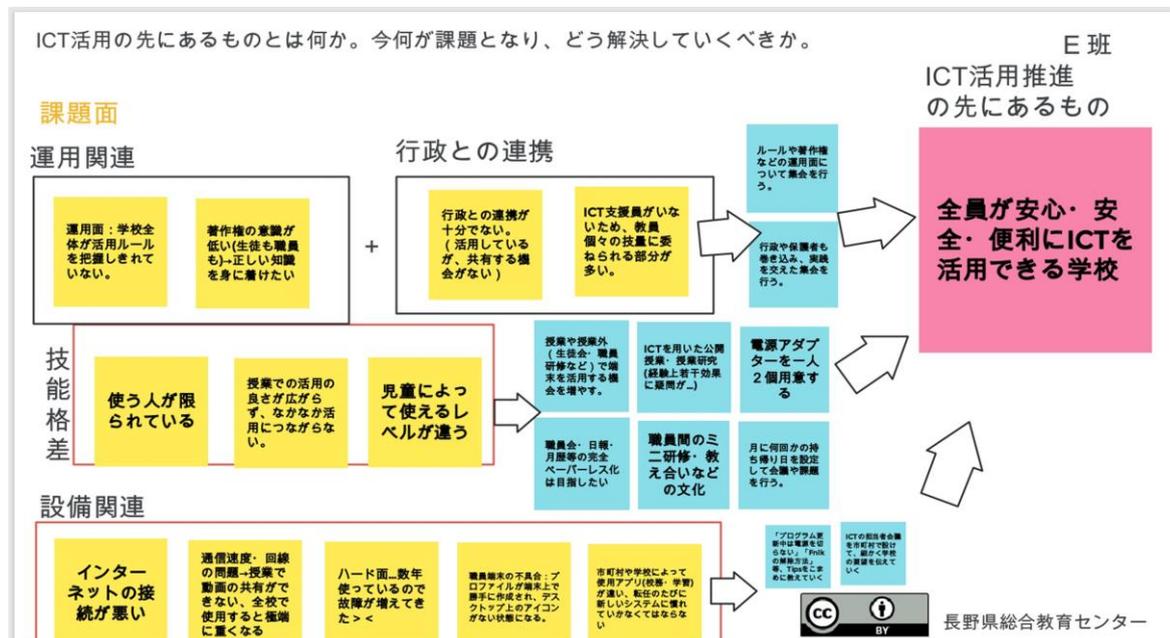
① 4人グループでGoogleのジャムボードを活用して、「自校のICT活用の現状」を情報交換する。

K…Keep (続きたいこと) P…Problem (不満点・問題点) T…Try (改善点・工夫)

に分類しながら、対話を通して自身の学校の実情を語り合う。



② 同じグループでジャムボードを活用しながら、ICTの課題とICTを活用した先にどのような未来を想像するのかを考えあう。



(3) グループで情報交換し、全体共有

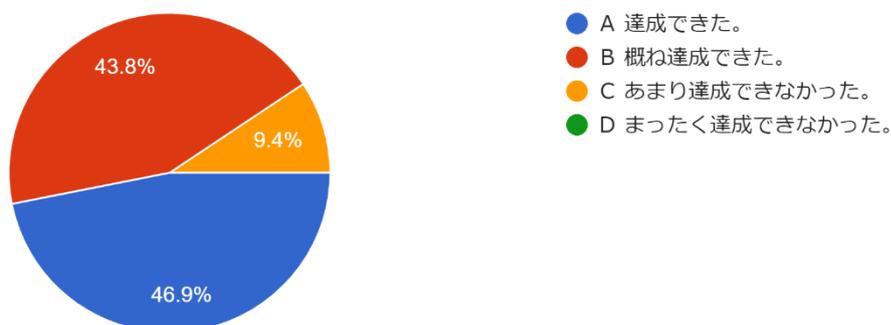


最初に、自身の思いや考えを入力する時間を確保したことで、自身のこれまでの経験を踏まえながら多くのICTの魅力や課題等が話題としてあげられた。また、アイデアが思いつかない場合には、他グループのジャムボードを参考にしながら再考する参加者の姿も見られた。自らがICTを体験しながら研修を行うことでICTの魅力や良さを実感できることも、自校への還元材料の一つになりそうだと感じた。

(4) 受講者のふりかえりから

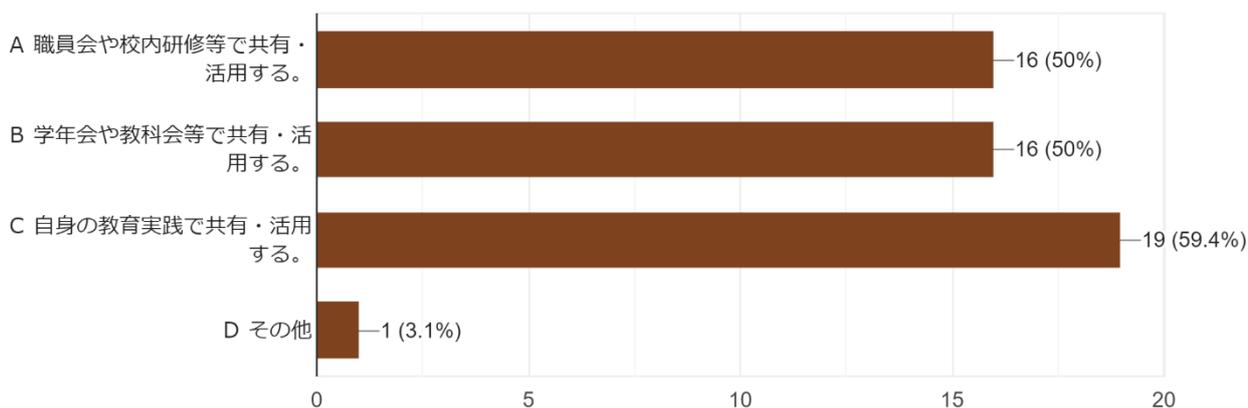
I 研修の成果 講座のねらいを達成することはできましたか。下の○に✓を入れてください。

32件の回答



II 研修内容の共有・活用 研修で得られた内容を…。下の□に✓を入れてください。（複数回答可）

32件の回答



業務改善につながるヒントが見つかった。特に出席連絡には C4th アプリの利用であったり、グーグルカレンダーを利用した情報の一元化などは本校でも導入できるのではと感じた。

I C T活用における問題点をそれぞれ分析し、解決策と I C T活用のその先にあるビジョンを共有できたと考える。学校としてできること、家庭にお願いすること、文科省や県教委に申請していくことが具体的に分かった。

I C Tの具体的な活用例についての研修と思っていたが、より深い学びにつながった。I C T活用を進めていく意義や、その先にあるものを見据えながら利用していきたい。

I C Tを使うことはあくまで手段だということを絶対に忘れないようにしたい。自分で全部やろうとするのではなく、できる人と一緒にやろうという気持ちで気軽に取り組んでいきたい。

今回の研修で、児童生徒全員が参加できること。ユニバーサルデザイン化やインクルーシブ教育の観点から個別最適な学びと協働学習あわせた授業を目指していきたいと思いました。

(5) 成果と課題

研修の成果としては、グループワークで各校の状況を共有し、ジャムボードや Google スライドを用いて課題を整理した上で、今後の具体的な取り組みを各グループで対話しながらまとめた。悩みや課題を共有できたことで受講者の気持ちが前向きになったと考える。また、講師による講義の途中で、都度スプレッドシートによるリフレクションを繰り返したことで、時代背景や I C T活用の意義と推進方法について段階的に理解が深まったことが受講者の感想から読みとれる。さらに、本研修のグループワークで作成した成果物であるジャムボード、Google スライドを PDF にしてオープンデータ化した（受講者には同意済）。受講者が自由にアクセスし、それを研修事後のふりかえりや校内研修等で活用できるように整えたことで、I C T推進をさらに進める各校の補助材料とすることができた。

課題としては、受講者アンケートの受講目的の達成度では、Bの割合も高く、Cも1割近くに達したことから、受講者の満足度は決して高いとは言えない。その理由は、I C Tの具体的な活用例について研修を深めたいと思って受講された教職員にとって、I C Tを活用した業務の効率化に直結しない話題も含まれていたためだと推測できる。受講者のニーズをていねいに把握し、研修内容の幅が広がりすぎないように、ある程度焦点を絞って深めていく必要がある。

(6) 次年度の方向

- ・ 受講者の願いを事前に把握した上で、研修内容を精選し、受講者のニーズに沿った講座を構築していく。その際、講師による講義とグループ演習の内容がつながり、グループでの対話から出てきた疑問点や意見について再度講師にコメントいただくなど、柔軟にファシリテートしていく。
- ・ 各校の I C T推進担当者を対象とした講座を構築して実施したが、そのニーズは引き続き高いと考えられ、受講者にとって校内研修推進の背中を押す研修内容へと一層の工夫が必要である。学校現場の I C T活用の様子や各校の実践等を通して、新たな気付きにつながる研修講座を構築していく。

アプローチ2:教育センター研修での学びを自校につなげるための校内研修に対する支援

〈ねらい〉

教育センターで得たICT活用に関わる学びを校内の教職員と共有し、それぞれの実践につなげやすくするために、その校内研修の進め方の相談や使用する演習シート等の準備を一緒に行ったり、当日の校内研修運営の支援を行ったりするための「**教職員研修会サポート**」の体制を整える。

「研修で得た学びをもっと学校に還元したいけれど、自分から動き出すことは難しい。」という受講者の思いに、教育センターの研修受講者と校内研修とを結ぶ支援の糸口があることで、教職員同士のつながりを支えていくための支援につなげていくことができる。

(1) 教職員研修会サポート実施の背景



研修講座のアンケート結果をみると、各講座を受講された後に、自校での職員会、学年会、教科会等、何らかの形で共有したいとお答えいただいた教職員の割合が増えてきていることから、校内で受講者の学びを共有する機会をとっていただき、そこに教育センターの主事がサポートに加わることで、教職員同士のつながりを支え、学校組織力の向上につなげられるのではないかと考えた。また、総合教育センターの研修講座での学びや受講者の熱量が、その先生の中だけに閉じられてしまうのではなく、所属校に戻って同僚と共有することで、受講者の学びが整理されたり、教職員一人一人が自身の授業観や子ども観をふりかえったりすることにつながるのではないかと考えた。

また、「サポート」という形をとったのは、教職員の自律的な学びを目指し、自らの手で研修を充実させていく学びを大切に考えたからである。

(2) 教職員研修会サポート対象講座

主として、校内研修における情報交換を経て、学校運営、学年連携、学級経営等につなげられそうな講座を主な対象とする。(ICT活用・探究的な学び・道徳・人権・マネジメント・インクルーシブ教育等の教職員全体にかかわる研修講座)

[令和4年度：17講座] [令和5年度：22講座]

[令和6年度：29講座]

(3) 教職員研修会サポートの充実にむけて大事にしていること

◇教育センターの主事が学校に訪問して一方的に講義をするという形ではなく、校内の教職員一人一人が「自己課題や悩みの共有」⇒「自身の経験の語り合い」⇒「これだけは挑戦したいことの自己決定」という流れを大切にサポートすることで、参加した教職員のお互いの思いや願いに触れる機会を大切にしていく。

◇指導主事、専門主事が研修会当日、訪問できない場合でも事前の研修計画や研修後のアフターフォローにあたる。また、オンライン希望にも対応していく。

◇校内研修でも、センター研修と同じように、グループごとの対話をベースにした研修内容を計画する際にICT機器を大いに活用し、共同編集を通して他グループの考えにもふれながら中身の濃い研修になるよう工夫していく。研修の過程を記録として残し、その後の実践につなげていただく。

◇校内研修の時間は管理職との相談で設定し、各学校からの依頼時間に合わせる形で中身を構想する。

(4) 教職員研修会サポートを活用した具体例

「学校組織マネジメント応用Ⅲ～ICTと学校マネジメント～」の教職員研修会サポート
サポートした学校 県内小学校（職員 28名）

- ①サポート希望校から派遣申請を提出いただき、その際、校内研修会を実施する理由や研修会後に期待する教職員の姿等を記入いただく。（以下は、実際に送っていただいた申請書の一部）

| | |
|-----------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4 研修参加者数 | 教職員 28名(対象:全職員) ※対象欄には「全教員」「〇〇教科会」「〇学年会」等ご記入ください。 |
| 5 内容(できるだけ具体的にお書きください。) | |
| ①講座番号 | (3-2-09-43) |
| 講座名 | 「学校組織マネジメント 応用Ⅲ(オンライン)」 |
| ②研修会を実施する背景(現状と課題) | <ul style="list-style-type: none">・授業では、ロイノートを活用し、学習カードの配付や提出、提出されたものをみんなで見合うなどを日常的に行っている。一方、同時共同編集の取組はあまり進んでいない。・職員としては、時間外勤務時間の縮減が喫緊の課題である。昨年度より校務のICT化を進め、職員会議のペーパーレス化や日報を廃止して連絡はGoogleのチャットで行う、また、各種アンケートをフォームでの実施などを取り入れてきた。 |
| ③研修会のゴール(本研修会を終えた先生方が、どんな気持ちや姿になってほしいか) | <ul style="list-style-type: none">・協働的な学びの方法の一つとして児童が共同編集を活用することができそうだと、授業に取り入れてみようという思いをもつ。・今まで通りではなく、新たな取り組みに挑戦することで校務の軽減が図られそうだと、やってみようという前向きな気持ちをもつ。 |

- ②研修講座を受講した先生と、当日の校内研修についての打合せを行う。

今回の事例では、担当の先生とメールでのやりとりで打合せを行った。打合せの内容は以下の通り。

ア) グループ編成について

3～4人のグループになるよう人間関係を見ながら担当の先生に編成していただく。その際、ファシリテートができそうな職員を1名ずつ入れる。学年を混ぜるか混ぜないかを相談し、今回は経験年数も学年もバラバラになるように編成することになった。

イ) 端末の準備と校内研修会場の確保について

Wi-fi環境下での研修ができるようお願いするとともに、機器が足りなければセンターから持参できることを伝えた。

ウ) 研修の日程について

1時間の研修時間の中身をどう構成するかを相談し、具体的なタイムテーブルを作成。対話の時間を多めに取りたいという学校側の希望もあり、本来なら研修の最初に行うはずだった個人の入力部分を事前入力(研修が始まる前までに)するようにした。

エ) 当日使用する資料やICT共同編集用のURLの共有

今回は、GoogleスプレッドシートとGoogleフォームを使うにあたり、事前に教育センターで作成したシートやフォームのURLを学校に送ることになった。

- ③教職員研修会サポート当日に学校訪問(センターの専門主事1名)し、校内研修をサポートする。

[校内研修の内容]

事前にサポート校ランドデザインと日課表は手元に用意してもらい、ICTを活用することで、

さらに当該校の効果的な活動につながっていきそうなアイデアをグループごとに情報交換した。

【当日のタイムテーブル】

| |
|------------------------------------|
| ①本研修会のねらいやゴールの確認 5分 |
| ②入力されたアイデアについてグループ内での発表 10分 |
| ③職員全員がICTの活用を实践できそうなアイデアについて検討 25分 |
| ④各グループで話題になった「一押しのアイデア」を発表 10分 |
| ⑤リフレクション 10分 (Google フォーム) |

【事前に個々のアイデアを入力していただいたスプレッドシート】

| グランドデザイン・日課表から 着目した内容・項目 | みんなで実践していけそうな「ICT（クラウド）を活用した取組」 | 難易度 1 2 3 |
|-----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|
| 園や他校との交流 | 牟礼小の学校生活動画をやって、園児に紹介する。 | 2 |
| 職員会議資料の保存・閲覧 | クラウド上で資料を閲覧し、職員会議内で変更になった点についてリアルタイムに共有を行う。 | 2 |
| 家庭学習の丸つけ・直し | Eライブラリや提出箱の共有などで、やったらすぐに自分で評価できるようにする。次の日に持ち越すと、学校に着たくなくなる原因ともなり得る。 | 1 |
| 地域での活動を紹介 | 見字や田畑の様子をiPadで撮影し、全校で紹介するコーナーを作る。(時間を設定する)。学期末に指定された学年が行うのではなく、伝えたくなくなったときにこまめに短時間でできるようにする。 | 1 |
| 月歴と週歴のリンク | 月歴を打てば、週歴も完成する。学年の時間割も支援の先生方のわりふりも、ある程度でき上がる。 | 3 |
| 教学会の要項などをデータ化 | 職員会要項はチャットに上がるようにしていただいたので、教学会もロイロノートで共有したらとても良い。一方、どのように保存したらよいか、迷う。 | 1 |
| 週案と指導時数のリンク | 週の授業予定表と指導時数の表がリンクすると指導時数を打ち込みを忘れることもなく、手間が省ける。 | 2 |
| 職員会（職明会）会議連絡 | 教室で児童対応していても内容を確認できる。 | |
| 支援の予定表 | 各クラスの予定を入力すると自動的に作成したい | |
| 児童委員会の委員会カード・次第 | ロイロノートで次第の共有や、まとめの提出を行い、記入の時間の短縮・委員会時間の内容の充実を図る。 | 2 |

【校内研修のグループ対話と全体共有の様子】



【リフレクションから】

- ・そのときは思っても多忙な中で伝えずに終わってしまうことも、今回のような機会を設けることでできそうなことを話し合えた。先生方が感じていることを共有できた。
- ・時数計算と週予定のリンク、児童会の進行計画をロイロで作成、保健室登校児童の下校時刻をクラスルームで児童が記入し、教員間で共有、など、動き出せそうなことが見つかった。
- ・他校の活用の様子がもう少し詳しく知れると良かった。
- ・グランドデザインや日課表という視点より、業務改善の視点に重心がいていましたが、常に立ち返る

ところはグランドデザインですので、子どもたちの資質能力を育むために何をしたらよいか、そこにICTを取り入れることで可能性が広がるのではないかと、という視野が開けた気がします。また、対話形式だったことで、閉塞気味だった思いが共有でき、やってみようという前向きな思いに変わることができたと思います。次は行動です。

④学校からふりかえりアンケートを提出いただく。

令和5年10月28日

「教職員研修会サポート」ふりかえりアンケート

長野県総合教育センター 企画調査部

このアンケートは、先生方の声を今後の学校訪問支援の改善に役立てていきたいと考え、お願いするものです。率直にご記入いただき、下記までFAX、または、メールでご回答ください。お手数をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

長野県総合教育センター企画調査部 ファクシミリ 0263-51-1290（送信票は不要です）
 メール sogokyoiku-kikaku@pref.nagano.lg.jp
 （この書式は、長野県総合教育センターのホームページからダウンロード可能です。）

| | | | |
|---------|--------------------------------------------------------|--------|--------------|
| 実施日 | 10月4日 | 担当専門主事 | 企画調査部 [] 主事 |
| 学校名 | [] 小学校 | 記入者氏名 | [] |
| 研修講座名 | 学校組織マネジメント 応用Ⅲ ～ICT活用と学校マネジメント～ | | |
| 研修会のねらい | ICT（クラウド）の可能性を語りあうことを通して、「ICT（クラウド）活用」の実践や取組へのきっかけを得る。 | | |

ふりかえりの項目は以下の通り。

- ◇今回の研修会は、学校の願いや教育課程にそった研修会となったでしょうか。
- ◇その理由を教えてください。
- ◇専門主事のサポートはいかがでしたか。よかった点や、さらにサポートしてほしい点、改善が必要と思われる点があれば教えてください。
- ◇「教職員研修会サポート」で今後利用してみたい内容や新しく解説してほしい内容、その他要望等がありましたら教えてください。

(5) 成果と課題

(4)の項目で事例としてあげた「学校組織マネジメント応用Ⅲ～ICTと学校マネジメント～」の教職員研修会サポートにおいて、校内研修後の追跡調査を行った。教頭先生から教職員研修会サポートがきっかけになって生まれたICTにかかわる変化について聞いてみると、以下のような回答があった。

○対話型校長講話での校長先生からの問いに対して、たてわり班ごとに考えをタブレット入力し、AIテキストマイニングでまとめたものを共有した。より多くの意見の集約共有をクラスルームやロイロノートを用いて行うなど活用した。

○特別教室の使用時間予約表は、今まで職員室に掲示してある紙のカレンダーに書き込んでいたが、グーグルカレンダーを利用する形を試行し始めた。この試行に際しては、若手職員が積極的にかかわり、職員への説明会も率先して行った。

- 今まで紙に書いていた児童会の進行計画などをタブレットへの入力にした。児童から職員へもデータを送ることで確認をしている。また、児童会の時間の中でもタブレットに事前に入力したものをテレビ画面に映したり、個々が持ってきたタブレットに転送したりすることで、児童と担当職員の負担を軽減することができた。
- 6年生の児童からのアンケートをロイロノートを利用して、職員のタブレットに送付し回答するようにした。

この回答から、わずか短時間で、当該校におけるICTを活用した取組が進んでいることがわかる。Google カレンダーの活用や、児童会でのICT活用は、10月に行った教職員研修会サポートにおいて、グループで話題になったことがきっかけになって動き出したという。今回の校内研修においてお互いに思いや願いを情報交換できる機会があったことで、一人の教職員のアイデアや、やってみたいと考えている取組が表に出て、少しずつ議論が進み、実践に至った。ICTにかかわる内容に限らず、お互いの考えに触れ合う協働的な研修や情報交換の機会があることで、様々な教職員を介してじわじわ広がり実践につながっていく。さらには、全体を巻き込みながら学校が組織的に駆動することでチーム学校の実現につながっていくのだと感じた。

課題は、この教職員研修会サポートの依頼数を増やしていくことである。コロナ禍もあり、令和4年度には2校、そして令和5年度は6校からの依頼にとどまっている。実際に研修会を終えてのふりかえりや、担当した主事の話からは、同僚との対話が実際に始まると、時間が足りないうらい議論や情報交換が盛り上がったと報告を受けた。普段同じ学校にいながらも忙しさの中でなかなか関係性がもちづらい日常に、校内研修等、対話を通してお互いの考えに学び合うことの価値を見いだしていくとともに、学校からの依頼を待っているだけでなく、教育センターからもその魅力について発信していく必要がある。

アプローチ3:教育センター研修の講座運営改善とセンター所員の意識改革

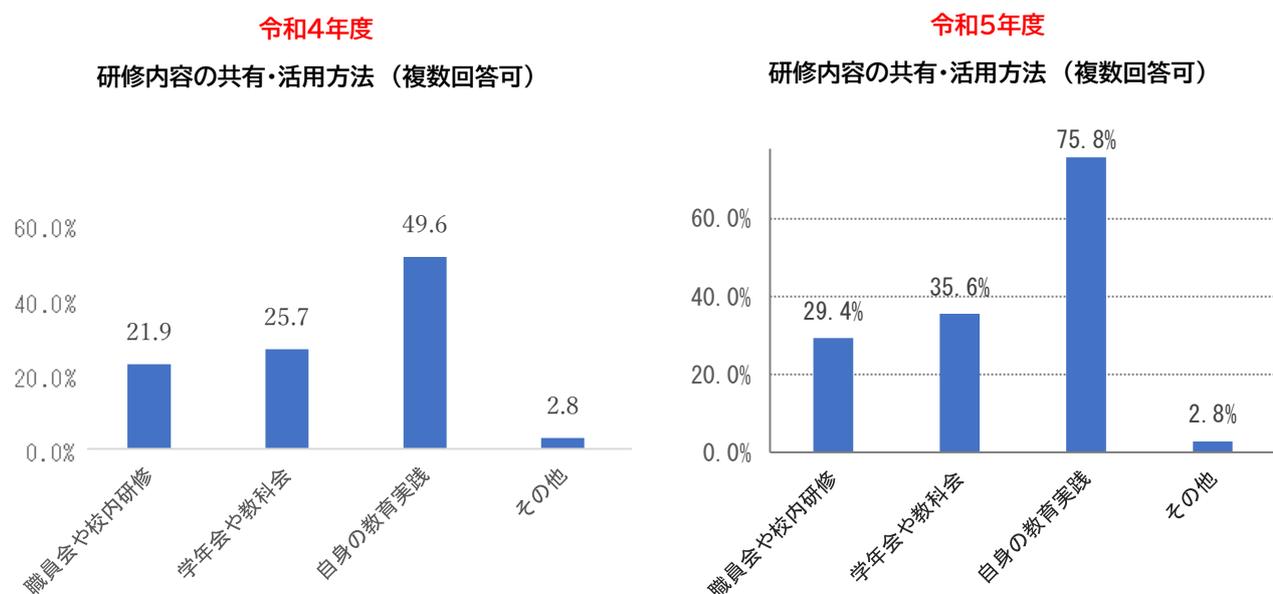
〈ねらい〉

教職員一人一人がICT活用指導力を向上させていくため、ICT活用に直結する研修講座だけでなく、教育センターで行っている300を超える研修講座（指定研修、希望研修含む）すべての講座において、教職員が自身の学びを自校に戻ってからの協働的な学び合いにつなげやすくなるように、「対話」を核とした協働的、体験的な研修講座への運営改善を行う。

教職員一人一人がICT活用指導力を向上させていくため、ICT活用に直結する研修講座はもちろん、教育センターで行っているすべての研修講座において、その日その場所で完結する研修ではなく、受講者が研修内容を自校につなげ、多くの同僚と共有できる研修への意識改革が必要だと考えた。それは、ICT活用指導力の向上には、ICTを活用したコンテンツやICTの操作方法の知識・技能だけでなく、職員間のつながりの糸が何本にも増えていくことで、一人ではなく、共に創造し、解決していける職員組織が欠かせないからである。

ICT活用が決して特別なものではなく、教職員一人一人にとって日常的なものになるためにも、より体験的で、より汎用性のある講座運営を意識するとともに、研修内容を教職員が自校に戻ってから協働的な学び合いにつなげやすくなるような手だてを考えることで、じわじわと少しずつ受講した教職員の熱が浸透していくことを願い研修を行ってきた。

以下は令和4年度と令和5年度の受講者アンケートの比較である。このアンケートには、センターで学んだことをどう活用していくのかを全研修講座で受講者全員に記入していただいている。受講者と同じ目線でともに考え、「対話」をベースにしながら深め合う講座運営を意識したことで、自身の教育実践だけでなく、職員会や校内研修、あるいは学年会や教科会で多くの教職員と共有したいと願って研修を終えられた教職員が少しずつ増えてきている。



これまでずっと令和4年度とだいたい同じような割合で推移していた率が、令和5年度で増加したのは事実だが、まだ職員会や校内研修につなげたいという回答は全体の3分の1に満たない。この割合を増やすためにもセンター所員の意識改革を進めていく必要があると考える。

(1) 令和5年度の研修講座の目標

令和5年度

長野県総合教育センターの目標と

それを実現する3つの重点

総合教育センター事業目標

ベストミックスによる効果的な研修を通して
主体的に学び続ける教職員をサポートする

- 研修をつなぐ** ◆総セ研修と校内研修のベストミックス
◆研修講座と情報提供のベストミックス

研修の「ふりかえりシート」の活用促進

「教職員研修会サポート」の充実

研修講座の資料・演習シート等のデータ共有

- 研修で深める** ◆自身の経験と他者の学びのベストミックス
◆世代をつなぐベストミックス

ICTやクラウドを活用した探究的、体験的な研修の充実

対話を促す受講者相互の実践発表・情報交換の場の充実

- 研修の効率化** ◆受講形態のベストミックス
◆最先端とこれまでの研修のベストミックス

DXの推進 個人端末の持込推奨

電子申請による手続き

オンライン・オンデマンド研修の充実

総セホームページの充実

令和5年度のセンターの目標を「ベストミックスによる効果的な研修を通して、学び続ける教職員をサポートする」とし、センターとして共通して大切に考えていく取組を大きく3つの層で示した。「研修の効率化」を図ることで業務改善に努め、研修講座の中身を充実させることで研修を深め、研修で深めたことを校内研修につないでいくこと共有してきた。

研修において、受講者が得た知識やスキル、他の受講者との対話から広がった「指導観」「授業観」「教師観」を教育センターの研修だけで完結させてしまうのではなく、帰校後の実践につなげやすくし、校内でのマネジメントにどうつなげていけそうかも含めて研修の中に盛り込んだ。

(2) ICTを活用した講座運営の工夫

ICT機器を体験的に活用（Google アプリ等の活用）することを意識しながら研修講座を運営することを大切にしてきた。ただし、ICTを活用することを講座のねらいとするのではなく、あくまで、各々の研修講座のねらいを達成したり、やりたい内容を実現したりする際の効果的な手段としての活用とすることを心がけた。講座を担当した専門主事たちからは、ICTを活用するようになり、より多くの受講者の意見や考えに触れる機会が多くなったと感想をいただいている。

体験して実感したICT活用の良さや魅力は、自然と同僚に伝えたいのではないかと期待通り、体験できたことを自校で共有したいという受講者のふりかえりも多い。また、個人の端末の持参を呼びかけ、作成した資料のデータ等の持ち帰りができるようにしてきている。センターのタブレットやPC端末の貸し出しも同時に行い、必要なデータはGoogleドライブへ期間を設けてアップロードするようにした。

(3) 研修講座における主なICT活用アプリと活用場面

研修講座における講座運営は、その講座担当の主事に委ねられる。1人で行う講座もあれば、複数の主事で行う講座もある。研修の内容、人数、年齢層、校種などにより、講座の運営方法は変わり、ICTを活用した講座運営の方法も講座担当者ごとに多岐にわたる。

下に示す表は、令和5年度の教育センターで行われた274の研修講座において、講座担当の主事が活用したICTアプリケーションの頻度とその活用場面である。センターの主事35名の入力情報（複数回答あり）を整理した。

| ICT活用場面と活用アプリの相関 | | | | | | | | | | | | |
|------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|----------|------------|-----------|-----------|-----------|------------|
| | Gクラスルーム | Gジヤムボード | Gスプレッドシート | Gスライド | Gドキュメント | Gフォーム | Excel | Powerpoint | Word | Zoom | その他 | 合計 |
| 受講前 | 1 | | | 1 | 1 | 2 | | | | | 2 | 7 |
| 導入 | 1 | 1 | 24 | | | 1 | | 1 | | | | 28 |
| 意見集約 | | 9 | 7 | 1 | | 11 | | | | | 2 | 30 |
| 整理分析 | 6 | 10 | 2 | 10 | | | 1 | | | | 5 | 34 |
| 資料作成 | | | 1 | 27 | 18 | | | 3 | 1 | | 13 | 63 |
| ふりかえり | | | | | | 173 | | | 14 | | | 187 |
| 受講後 | | | | | | 8 | | 1 | 1 | | 4 | 14 |
| 全場面 | 13 | | | 7 | | | | 1 | | 32 | 2 | 55 |
| その他 | | | | 1 | | | | | | | 5 | 6 |
| 合計 | 21 | 20 | 34 | 47 | 19 | 195 | 1 | 6 | 16 | 32 | 33 | 424 |

今回入力してもらった講座は274講座。そのうち、ICTを1つでも活用した研修講座の数は241講座。割合にして9割近い講座でICTを活用していることが分かった。講座研修講座で活用されたICTアプリケーションの結果から、Googleフォームの活用が目立つ。研修のふりかえりをGoogleフォームを使って集約することで、入力だけでなく、名前を伏せた状態でその日の他者の学びを全員で確認することができる。活用場面ごとに見ると、ふりかえり以外にも、導入や研修を深める段階での意見集約、整理分析、資料作成での活用が見られる。Googleのアプリの活用が多いのは、受講者全員での共同編集が可能であることも関係している。

先に述べたように、アプリケーションの活用については、研修講座によって様々ではあるが、活用場面と活用アプリとの相関から、その活用の仕方に特色がみられる。例えば、Google ジャムボードは、グループごとに、個人の意見を集約したり、集約された意見を分析したりしやすく、Google スプレッドシートの活用方法の詳細を見てみると、導入時に個人の悩みや課題、困り感を集約するために活用していることが分かる。Google スライドは資料作成での活用が多く、そのあとに発表場面や情報交換場面がある場合に活用されている。同じく Google ドキュメントも資料作成が主だが、こちらは、指導案や単元展開など、その後の自身の実践にそのまま用いる資料の作成で活用されている。

研修講座1つにつき、使用するアプリケーションが1つということではなく、様々なアプリケーションをその場面ごとに使い分けながら研修を進めることで、受講者自身も多様な学び方にふれながら、体験的に学んだことを、その先にある一つ一つの授業実践につなげやすいのではないかと考える。

(4) 研修観の転換に向けた所員研修の転換

中教審の答申、そして、NITS 戦略の一つとして「子供の学び」と「教師の学び」が相似形であるという新たな学びの形が具体的に示されたことをきっかけに、所員研修においても、一方的に報告を聞くスタイルから、これまで以上に現場の教職員の学びにつながる研修をどう作り上げていけばよいかを情報交換し、対話を重ねながら研修講座運営に生かしてきた。

また、所員研修の運営においては、すべての研修を同一の型で行うための議論ではなく、お互いの研修の実践を語り合う機会という位置づけにした。そして、グループごとにICTを活用して成果や課題をクラウド上で出し合い、整理分析し、これまで気付かなかった新たな視点をお互いに得て、共通して出てきたキーワードやポイントを全体で共有しながら次の研修講座に還元していくという流れを大切にしてきた。所員研修では教育センター内の他部の主事同士、また義務籍、高校籍の主事が混ざってクロスセッションすることで、新たな気付きにつながるケースが多い。

【所員研修で大事にしてきたポイント】

- 対話時間の確保 個人の実践を振り返る時間も確保しつつ、対話をメインに
 - 対話が深まるためのファシリテーターの位置づけ 全員が経験できるグループ編成に
 - 記録に残すためのアプリの活用 Google スライド、ジャムボード、フォーム等 記録の共有
 - 主事も体験的にICTを学ぶ機会 端末やタブレットの持参 ICT活用の魅力の実感
 - センター内の部を超えた交流 情報交換のねらいやテーマによってグループ編成を柔軟に
 - 情報交換のテーマの焦点化
- 4月) 研修講座で大事にしてきたこと (残留の所員が新任の所員へ⇒新任所員からの質疑及び対話)
 - 5月) 研修観の転換について (NITS 荒瀬理事長講話⇒対話)
 - 6月) 研修講座「ふりかえり」の工夫における情報交換 (ジャムボード入力⇒対話)
 - 7月) 前期講座運営の成果と課題 研修講座でのモヤモヤを語り合おう (ジャムボード入力⇒対話)
 - 8月) 調査研究報告のワークショップ (演習と対話)
 - 10月) 探究的な研修のあり方 (NITS 佐野審議役講義演習) 探究的な研修とは何か (対話)
 - 11月) 次年度の講座に向けた情報交換 次年度チャレンジしたいこと (Google スライド入力⇒対話)
 - 1月) 調査研究セミナー6本 (60分×6) (すべて対話時間を確保したセミナーに)
 - 2月) 研修講座の受講者アンケートの結果の背景にあるものは何か (ジャムボード入力⇒対話)
 - 3月) 一年間の研修のまとめ 実践記録をもとにした実践報告会 (実践記録発表⇒対話)



(5) 令和5年度 所員研修の一部紹介

【6月21日(水) 所員研修 研修講座の「ふりかえり」の工夫における情報交換】

自身の担当する研修講座における、「ふりかえり」の工夫や課題等をグループごとに Google ジャムボードに入力し情報交換し、全体共有した。ふりかえりの意義と、効果的なふりかえりの方法など、受講者にとって意味のあるふりかえりになるためにはどうすればよいか。

H 研修講座での学びを次につなげていくための「ふりかえり」

成果効果的だったこと名前

講義ごとに分けて質問すると、それぞれの講義が終わるごとにふりかえりを書くことができ、より具体的な内容で書くことができた。井口

午前終了のところ、
「昼食休憩時に、忘れないうちに印象に残った午前内容についての振り返り記入してもよいことを伝える」城本

閉講式で時間をとって書いてもらい、時間が足りなかった人は残って書いてもらう。共有の時間は取れなかった。井口

振り返りの観点の絞り込みについて。主な観点を提示して、自分が重点的に振り返りたい観点の幾つかを選択して記入してもらうなど 城本

研修講座が立て続けにあり、一回30人以上なので、読んでまとめている時間がない。(言い訳です)井口

大人数の口座ほど、ICT、テキストマイニングを活用したらどうですか？藤原

研修講座をまだ実施していないが、研修テキストのページ数が多くなってしまい困っている。どこまで削減できるか試行錯誤している。林

講義ごとに何を学んだかを書いてもらっているが、自由記述なので、もっと焦点化させたいかなもしいかな。井口

ICTは、「早く」「簡潔に」のイメージ。振り返りには適しているのか。藤原

希望する目的が同じだとやりやすい
グループでもいいので共有したい。

9:50~10:00に
ねらい確認
書前 → 1人1枚紙、15:30~17:00まで

①本日のベスト3 (個人4分) → ②口頭発表 (全体20分) → ③振り返り記述 (紙へ10分) 藤原

印象に残った部分
授業でつめるベスト3



出された意見を集約し所員全体に還元。次からの講座運営の参考にしてもらった

050621所員会 【研修講座での学びを次につなげていくための「ふりかえり」】情報交換まとめ

時間の確保

- ◆時間の確保が難しいが、理想としては、30分程度はほしい
- ◆記入の時間+グループ共有の時間+(全体共有)=30分~40分
- ◆活動を欲張らない
- ◆午前1回午後1回の2回に分ける
- ◆ふりかえり項目を午前午後の2項目に分けておくと、午前分は昼食休憩時に書ける
- ◆講師とは事前に交渉
- ◆ふりかえる項目の焦点化
受講者同士の対話につなげる

紙のよさ

- ◆講座の最初に渡しておき、都度メモ代わりにふりかえりを記入できる(フォームで回答する人は5~10%程度)
- ◆参集での研修の場合、入力での提出はどうしても講座終末時になるため、ふりかえりの時間に影響する
- ◆手元に自分の記入したふりかえりがしっかりある状態で対話することで、ふりかえりが活発になる
- ◆ICTは「早く」「簡潔に」が優先される
紙の方が受講者も使いやすさがある

ふりかえりの内容

- ◆授業の相似形としてのふりかえり
- ◆校内のどの場面で活用できそうかを具体的にイメージできる内容にしたい
- ◆ねらいの明確化と受講者への伝達をいねいにし、ねらいをもとに記入
- ◆「今日の一番」「本日のベスト3」
- ◆ふりかえる観点の例示
- ◆あえて焦点化するか、あえて焦点化しないかの判断(講座のねらいによる)
- ◆スキルのものだけでなく、自分の観の変容にも意識が行くふりかえり

その他の工夫

- ◆ジャムボードでのふりかえりとPDF配付
- ◆ふりかえり用紙に罫線を入れる
- ◆成果物をもとにしたふりかえり(お互いの成果物をもとにふりかえり及び情報交換ができればそれも有り)
- ◆講座のねらいにどれだけ戻れるか、どう意識させるか
- ◆講座導入で日常の「悩み」「困り」をふりかえておくと、そこに対する見通しが最後のふりかえりで見られる
Formsで回収したふりかえりは紙で印刷し、データは削除してOK

SCAN SNAPの活用



- ・PDF保存 一人5秒程度
- ・まとめてスキャンすれば1枚2秒
- ・総務PC8台インストール済
- ・教科1台 企画1台 生特1台
- 原本で返せる講座はできるだけ原本返却
- 終了後、スキャンして解散が理想

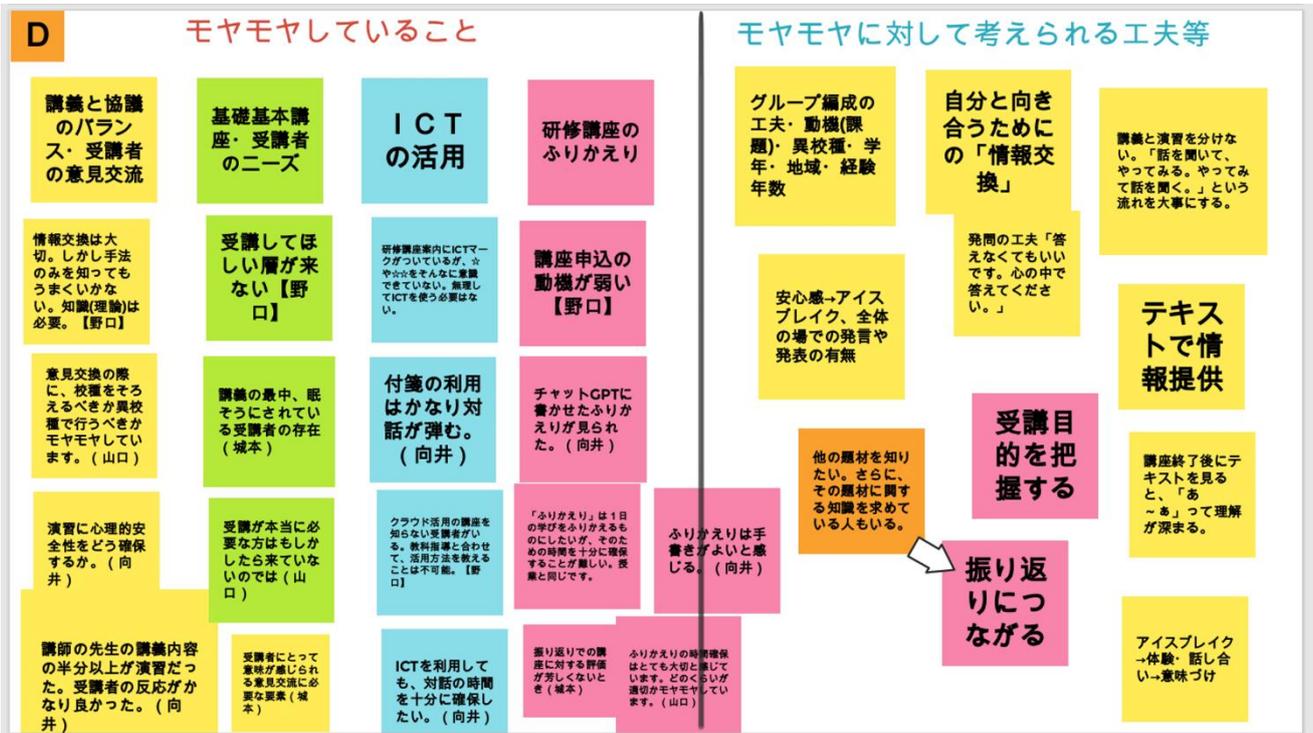
今後の課題

- ◆ふりかえりの価値づけと見届け
- ◆その後の追跡・次年度の実践発表者候補
- ◆アンケートとふりかえりの位置づけ(受講者にとって煩雑にならないように)
- ◆表にふりかえり裏にアンケート
- ◆アンケートの項目を絞り、表にのせる
- ◆アンケートはForms ふりかえりは紙
- ◆「なぜふりかえりを写真に撮るのか」「なぜふりかえりを返すのか」「なぜふりかえりを記入するのか」の共通理解と受講者との共有

【7月12日（水）所員研修 前期研修講座の成果と課題 研修講座でのモヤモヤを語り合おう】

所員への事前アンケートで、研修講座における「モヤモヤ」について情報収集し、寄せられた意見から多かった4つのテーマについてGoogle ジャムボードを活用して情報交換を行った。

- テーマ1 講義と協議のバランス 受講者の対話時間をどう確保するか
- テーマ2 受講者のニーズが多様であることへの対策は
- テーマ3 ICTの活用した効果的な講座運営にするには
- テーマ4 研修講座のふりかえりを意味のあるものにするには



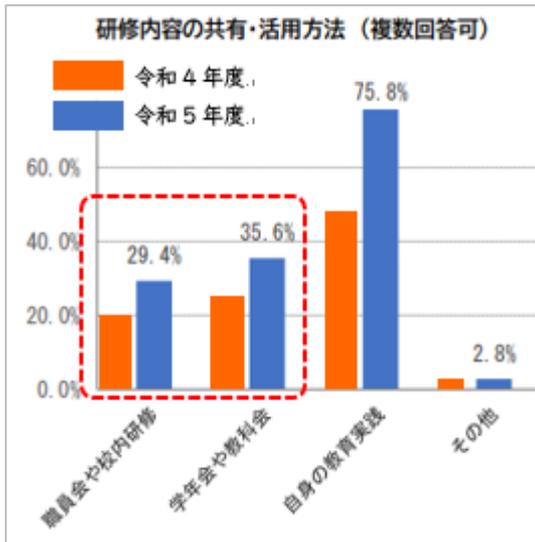
【11月8日（水）所員研修 令和6年度講座構築の情報交換 次年度チャレンジしたいこと】

次年度の研修講座の構築が始まった段階で、お互いが大事にしようとしている講座担当者としての「観」について、出た意見をGoogle スライドを使ってまとめ情報交換した。

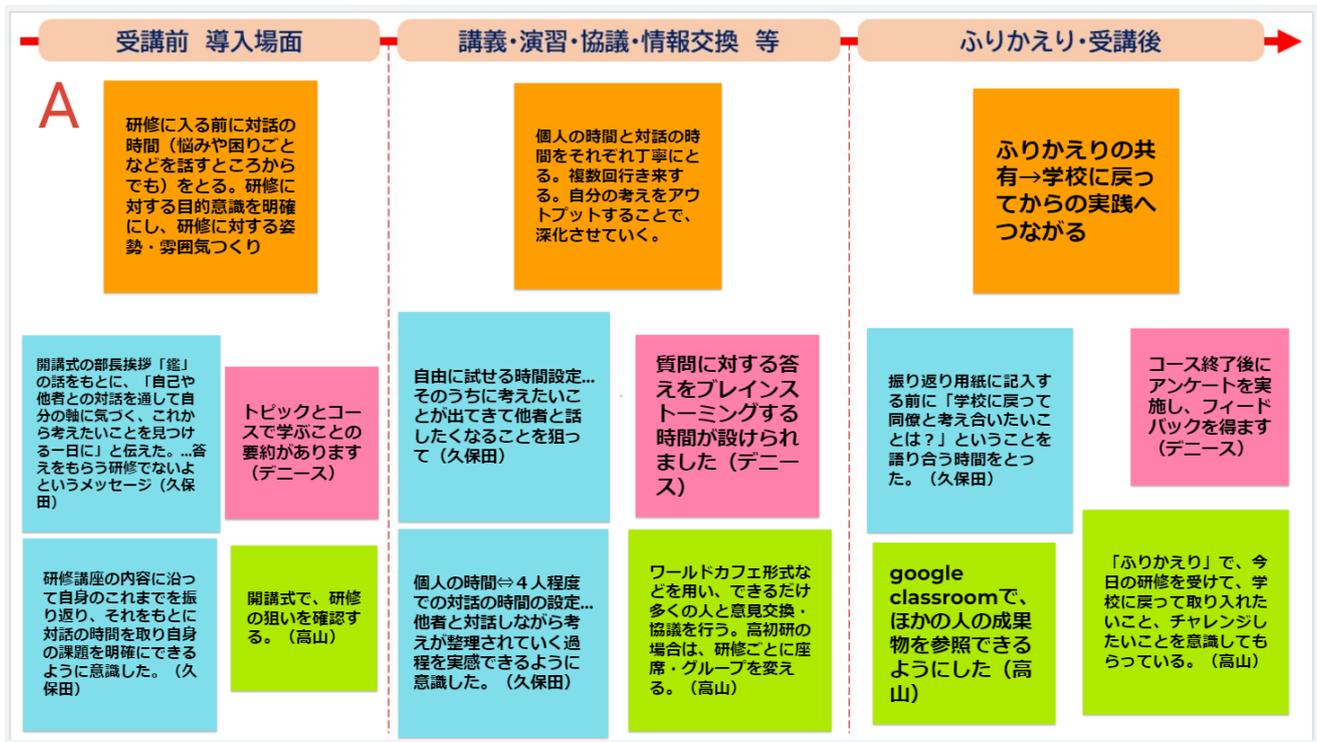
- G**
- 座席は講座内容にあわせて、グループは意図的に編成している。目的を受講者に伝えて、受講者に伝える。情報は技量によって違ってしまふ。義務と高校に分けて行くと、深まるのか、広げたいのかということ、明確に講座担当がもっている必要がある。
 - 午前午後のグループ分けが必要ではないか。最後の振り返りは一日同じほうが受講者同士の安心感はある。課題感、成果などによって、一つの軸は必要かなと感じる。基礎は、広めるのか。深めるのか。
 - 情産では広めて、各校で深める、教科で深めるなどのセンター部間の連携が必要になってくる。
- ★対話するためには？**

- 対話で最後のグループワークで、4, 5人でグループで一つ質問を考えさせる。5人の共通の土台で、振り返りをする。共通する土台をふることも必要。
- 設定が違う特性もある。温度差はかなり大きい。問いや目的が違う。
- 受講の意欲が低い受講者に対しての、アプローチのむずかしさがある。
- 受講者に課題を持ち寄ることで、共通して始められる。宿題があるとよいかも。実践事例集から始めると、さらに深めることができる。大切なものは現場に落ちているのではないかと。→もって行った法が得するよ！って文化が大切。
- 主事が価値づけることで、自信をもって帰ってもらう。価値づける必要性もある。

【2月14日（水）所員研修 研修講座の受講者アンケートの結果の背景にあるものは何か】



これは令和4年度と令和5年度のセンター研修の受講者アンケートの比較である。令和4年度はまだコロナの影響があり、突然オンラインに変更になった研修もあるので、そんな外的要因が影響している可能性もある。しかし、学校に戻って、「職員会や学年会、校内研修に活用したい」という思いをもってくださった受講者がこれだけ増えたということの背景にあるものは何か。これまでの研修講座での様々な工夫がプラスに働いているということを前提に、その背景について、下の図のように①受講前・導入 ②講義・演習・協議・情報交換 ③ふりかえり・受講後 の3つの段階において語り合い、Google ジャムボードにグループごと整理した。



(6) 成果と課題

令和5年度の教育センターの研修講座で目指す目標をもとに、その目標を実現するための方策をセンターの所員全体で共有することはできても、実際の研修講座にどう生かし、どんな成果が生まれ、どんな課題が残ったのか、またそれをどう解決しようとしているかという具体の部分についてはこれまであまり振り返ることができていなかった。共有することがゴールになっていた感覚も正直ある。だからこそ、語りと傾聴のスタイルでじっくり時間をかけて対話する所員研修を計画したことで、自然と自分自身の実践経験をもとに、自分自身の思いや願い、こだわり、習性、失敗談、困り感などの普段なかなか表出できない部分を素直に伝え合うことで、そこを補うアイデアやプラスに生かす方法など、多くの価値観や気づきに出会うことができています。

課題としては、所員研修でせっかく情報交換したことが次の所員研修につながっていくようにデザインしていくこと。令和5年度は1回1回の所員研修を単体で実施していた感が否めない。対話したこと

が連続的に積み重なることで、研修講座がさらに受講者に寄り添ったものになっていくことを期待したい。常に、最優先で考えるべきことは、その研修講座が本当に受講者一人一人の次につながるものになっているかどうか。自校に戻ってからの教職員同士のつながりを支えられるような研修講座を目指して、今後も対話を大切にしたい所員研修を継続、発展させていきたい。

V おわりに

今回いただいたテーマは「教師のICT活用指導力向上」を実現するための調査研究であった。試行錯誤した結果、教師がICT活用指導力を向上させていくにはICTの活用知識や活用スキルを個々で高めるだけではなく、お互い高め合ったことをつなぎ合う職員組織を作っていくことが大事なのではないかという方向で研究を進めてきた。それは最終的に、私たち教育センターが担う一つ一つの研修講座の運営にかかっているということに行きつくわけだが、昨年多くのセンター所員と対話をしていく中で、何度も繰り返して語られてきたことが、「その研修のねらいは何か」ということである。これまで私たちは感覚的に、あるいは前年度の研修を踏襲するような形で、研修の中身や方法等について何の疑問も持たずにただこなすだけの研修を行ってきたとはいなかったか。何のためにこの研修を行っているのか、何のためにICTを活用しているのか、何のために職員組織のつながりが必要なのか、「ねらい」や「意義」が明確になるだけで道筋が少し明るくなる。私たちが大事に考える一つ一つの研修のねらいに、受講者一人一人の願いが重なり、その研修で何をしたいのかが明確になることで、そこに自然と対話が生まれ、お互いの実践に学びあいたいと願う関係性ができるのではないかと考えている。

今回、新規で構築した研修講座が、ICT活用をねらいや意義を理解でき、職員組織のつながりを支える講座として位置づいていくために、また、教職員研修会サポートがさらに受けやすく、依頼しやすいものになっていくために、現状に満足することなく、さらに良いものに更新していけるような「対話」をこれからも大切にしていきたい。